# にじいろのなかまたち

<u>~ふたつの児童養護施設の交流ワークショップの記録~</u>

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

二つの児童養護施設の子どもたちが出会って、 交流することにどんな意味があるのだろうか? 子どもたちは本当にそんなことを望んでいるだろうか? 私たち、施設の外の人間が考える、勝手な押し付けではないだろうか?

最初に企画を考えたとき、そんな不安を抱えていました。

それぞれの施設に相談に行くと、職員の方々は確信はなさそうでしたが、 面白そうなのでまあやってみましょう、と言ってくれました。

そして初めて合同でワークショップをした日、 初対面の子どもたちは少し緊張しながらもいい表情で 踊ったり歌ったりしていました。 これはいけるかも、そんなに心配するようなことじゃなかったんだ、 と子どもたちに私は勇気づけられました。

その後、回を重ねるうち、参加メンバーみんなどんどん楽しくなってきて、 互いに刺激し合って表現したり創作したりするようになってきました。 音楽やダンスの力、そして参画してくれたアーティストの才能と人間性に感服します。 そして、子どもたちのために彼らに寄り添って、励まし、 移動の労も惜しまずワークショップに参加してくれた 二つの施設の職員の方々に心より感謝します。

> この子どもたちとさらに先に行くことができるかもしれない、 そんな可能性をいま感じています。

> > 芸術家と子どもたち代表 堤康彦

## この企画について

児童養護施設でワークショップをするようになって 10 年近くが経ちました。 施設の制度や子どもたちの現状について、疑問や気づきがたくさんあり、 子どもたちの未来を考えると心配も尽きない時間でした。

そんな中、文化庁が新しく立ち上げた事業に企画提案するにあたり、 ある日ふと「いつかみんなで新幹線に乗って遠くへ出かけられないだろうか」と思いました。 それを、音楽やダンスの力を借りながら、子どもたちや施設の職員の方々、アーティストたちと、 時間をかけて面白く実現できないだろうか、と。

2019 年度からの 5 年間を想定し、文化芸術活動を通して様々な背景を持つ人と人が、 万いを尊重しながら共に音楽やダンスを創作し、交流する場をつくっていきたいと考えています。 また、その作品や活動の記録を様々な形で社会に伝えていきます。

> 1年目となる 2019 年度は、アーティスト・ワークショップを通じた 2つの児童養護施設の交流と、各施設での発表会を行いました。 そして、1年間の記録として

この CD 付きドキュメント・ブックを作成しました。

#### 参加者について

二葉むさしが丘学園(東京都小平市)、児童養護施設カルテット(埼玉県さいたま市) 小学2年生~高校3年生及び施設退所者 15人

職員の人たちと相談して、表現活動を経験させたいと思う子どもたちを検討してもらいました。また、施設内で「何か やってみたい人」「他の施設の人と何かつくってみたい人」などの呼びかけに応えて参加してくれた子もいました。

#### 場所について

**2** つの施設の他、**2** 施設の中間地域にあり歌やダンスがで ① **8** 月 **13** 日 (火) きる場所をアーティストと探し、公民館等も活用しました。<br/>
② 8月14日(水) 発表は、職員の方や施設内の他の子どもたちに観てもらえ るよう、各施設で | 回ずつ行いました。

#### 児童養護施設について

児童養護施設は、児童福祉法に定められた児童福祉施設で す。経済的な理由や虐待など様々な事情により保護者と一 緒に生活することが難しい、概ね  $2 \sim 18$  歳までの子ども たちが暮らしています。子どもたちの生活支援や心のケア、 白立に向けた支援等を行っています。

※子どもたちの名前や、顔の分かる写真の掲載は控えています。

#### 日程/場所

児童養護施設 カルテット

一葉むさしが丘学園

③ 9月23日(月・祝) 埼玉県朝霞市民会館ゆめばれす

(リハーサル室)

④ 10月6日(日) 埼玉県朝霞市中央公民館(音楽室)

⑤ 12月28日(土)

⑥ 12月29日(日) 児童養護施設 カルテット

学園坂スタジオ (東京都小平市)

⑦ 1月25日(土)

埼玉県三芳町立竹間沢公民館

(音楽室・和室)

⑧ 2月15日(土) 二葉むさしが丘学園(発表①)

⑨ 2月16日(日) 児童養護施設 カルテット

(発表②)

# 加速度のない季節

セレノグラフィカ 隈地 茉歩

歌もダンスも演奏も盛り込まれた 5 つのシーン。8回重ねたワークショップの最後は、それぞれの施設での発表会で締め括られた。参加メンバーは、自分たちの「今」を誇らしく披露してくれた。本番という特別な時間だけが誘発する高揚感と達成感の中、「次また会えたら」という前提に立った振り返りの言葉が何人もの口から聞けたことを嬉しく思う。そんな子どもたちに向けて、こちらからも口をついて出た言葉がある。「誰かと知り合って仲良くなる時って、不安や心配もあったりするでしょ?この人ってどんな人かな?とか、こんなこと言っちゃって大丈夫かな?とか。でも私たちには、一緒に歌うことや一緒に踊ることがあったから。だから気がついてみれば仲良くなれてたんじゃないかな」。

人と人が出会って相手との距離を縮めていく時には、自信を無くしたり持ち直したりする繊細な試みが積み重ねられている。それが丁寧な作業であればあるほど、心の動きの襞も増す。とは言え、今の世の中に暮らす私たちには使い勝手のよいツールも与えられているので、メール交換の回数が増えれば相応の親しさを手にすることもできる。相手を受け入れ、相手に受け入れてもらいながらお互いの気心が知れていくというのは、まるで自分の存在の一部を交換しているかのような行為だが、言葉にばかり寄りかかってしまって安心する癖がついているのではないかと感じることもある。それだけ言葉が助っ人として頼もしいからだろう。

では、歌うこと、踊ることはどうだろう。これらは、 生の身体がそこに無ければ成立せず、誰かの目の前で あっても無くても何ら変わりなくできるほど単純では ない。多感な世代の子どもたちにとっては、自意識だっ て刺激されてしまう。ある意味、手間や忍耐が求めら れることでもあるはずだ。しかし、だからこそ、話すこととは異なる回路を通って相手に近づくことができる営みだと言えるのではないだろうか。物言わずして相手の心や身体に触れることのできる回路。それは、日常の中で無意識のうちに作動しているセンサーからひととき私たちを解放し、全てがたやすく言葉に置換できる訳ではない、肥沃な感覚平野に私たちを立たせてくれる。

もう一つの共通点として、そこに何の具体物も残らないということも挙げられる。歌声にしても身体の動きにしても、歌う先から、踊る先から消えていく。その場限りその時限りで留まることなく、あまりにもはかない。けれども、それゆえに時間を超えて、瞬時に子どもたちの成長に結びつくという奇跡を連れてきてくれることがある。

今回参加した子どもたちは、図らずも小学生と高校生が半数ずつで、普段の生活においては、興味の在り処にも言葉遣いにも開きがあることが想定された。ただ会話を重ねるだけなら、お姉さんお兄さんたちと年下の子たちという図式の上で親密になっていく範囲を出なかったかも知れない。しかし、3度目のワークショップ中に、子どもたち同士に特別な融和の瞬間が訪れたことをはっきりと記憶している。年齢差や日常の環境の違いによって存在していた距離感のようなものを、みんなで飛び越えた瞬間とでも言おうか。この空気感の変化は、ある種の匂いとしか言いようのないもので、高校生と小学生の間の垣根が取り払われたと同時に、大人である私たちも彼らや彼女らに受け入れられた瞬間だったと言えるかも知れない。

急かずに待つことの意味は重い。大人だけが彼らや 彼女らの変化を見守ろうとしていたのではなく、子ど もたちの方も大人たちの変化を見守っていたはずだ。 表情の細かさや、声のトーンの微妙な色合いを感じ取 り合ってきた時間の重なりがあり、そのやり取りの中 のポイントポイントに、融和の機会は散りばめられて いた。歌いながら、踊りながら、私たちはこんな風に お互いの距離を加速度をかけずに縮めて来たのだ。

子どもたちが生きづらくないように制度が整えられていくことは望ましいが、その前に、子どもたち自身が様々な環境を自力で生き抜いていく元気が蓄えられることが必要だろう。その元気の土台とは、自らが信じるに足る、身体的な実感そのものではないだろうか。この身体だからこそ感じることができる手応え。それこそが心をそっと支えていく。

発表会後の記念撮影の際のある高校生の言葉。「これって家族での記念写真みたいだよね。お母さん誰かな?お父さん誰かな?」。この言葉を聞いた時、私は、何と美しい問いだろう、と思った。

## アーティスト (ダンス)

セレノグラフィカ 隈地 茉歩・阿比留 修一

関西を拠点に国内外を問わず幅広く活動を展開する 男女二人組のダンスカンパニー。多様な解釈を誘発す る不思議で愉快な作風と、緻密な身体操作から繰り出 されるダンスで、多くの観客を魅了している。

隅地茉歩は「踊るぬいぐるみ」、 阿比留修一は「かかとの無い男」 とあだ名され、全国各地に遠征の 日々を送りながら 「身体と心に届くダンス」 を伝える日々を送る。 450を超える教育機関への アウトリーチも行い、

かりトリーチも行い、あびちゃん・まほさんとして人気

http://www.selenographica.net/

# アーティスト (音楽) **港大尋** (音楽家)

バンド「ソシエテ・コントル・レタ」を率い、 詩人やダンサーとのコラボレーションなど幅広 いフィールドで演奏活動をしながら、作曲家と して合唱曲、器楽曲、劇音楽、ダンス音楽など の作品を書き、同時にシンガーソングライター として活動する。

代表作に「瞼を閉じれば無重力の声色が」、「ディアスポラ」、「オペラ・美女と野獣〜琉球版〜」などがある。

CD 作品に「ソシエテ with 金時鐘」「がやがやのうた」「24 のプレリュード」など。著書に『記憶表現論』(共著)がある他、評論などをさまざまな媒体に寄稿。考古学・民俗学・人類学などの視点から、芸術全般を捉え直すような作業を続けている。

# アーティスト (音楽) **伊藤寛武 (フルート奏者)**

東京藝術大学音楽環境創造科卒業。 高校在学中より、自身のビッグバンドを 率いて作編曲家兼フルート奏者として 活動をはじめる。主に吹奏楽、合唱、 オーケストラなどコンサート作品の 作編曲及び指揮を手掛ける。

作編曲及び指揮を手掛ける。 フルート奏者としては、世界中の笛の 奏法を取り入れた多彩な音色を生かし、 コンテンポラリーダンス、朗読、映像と、 即興演奏によるコラボレーションを 続けている。



### ワークショップの様子を覗いてみよう!

#### 参加施設とメンバー

児童養護施設カルテット 高校生と施設退所者の計7人 二葉むさしが丘学園 小学2年生~高校生までの計8人

2 施設合わせて小学 2 年生~高校 3 年生及び施設退所者の 15 人が参加しました!

#### 場所について

2つの施設を行き来するだけではなく、市民会館や公民館も活用しました。 知らない場所に出かけていくことで、少しの緊張とワクワクが増えました!





# 8/13,14

# それぞれの施設でアーティストと初対面

子どもたちとアーティストの初めての出会いは、それぞれの施設で、 それぞれのメンバーと。アーティストのダンスや演奏を見たり聞いたり、 ヨガのポーズや二人組でふれあう身体ほぐしのワーク、タイコのリズムを 演奏することなどを通して、まずはお互いを知り合うことから始めました。

# 身体をほぐす

名前を呼びながらバンザイする 「名前でバンザイ」や、演奏に合わせて 歩いたりポーズしたりする 「ストップ&ゴー!」で身体ほぐし。 名前の代わりに好きな寿司ネタを お題にしたり、ポーズする時に 誰かと一緒に形をつくるなど、 5万いを知り合うきっかけにも なりました。

> ※イラストはワークショップに参加した Rさん(高校生)が描いてくれました。

# 9/23 朝霞市民会館 リハーサル室

# 2 施設合同ワークショップがスタート!

この日から2施設の交流が始まりました。 「名前でバンザイ」の中で、ハイタッチや、ポーズを考えるなど、

身体をほぐしていきました。 そして港さんのミニコンサート。

フルートを吹いてくれた子もいて、みんなで耳を傾けました。 その後は再び身体のワーク。最後に『カッパのロック』を、 タイコチームとダンスチームで合わせてみたりもしました。

# タイコのリズム

ジャンベというタイコを 歌いながらたたいたり、 全身を使ってリズムを味わいました。 楽譜も難しい技術もいらなくて、 その場で一緒にリズムを奏でることから 自然と音楽やダンスが 生まれていきました。



10/6 朝霞市中央公民館 音楽室 お互いの距離がぐっと近づいた日

前回までと同じく「名前でバンザイ」や歩くワークからスタート。 同じワークを積み重ねることで子どもたちもワークショップに慣れてきた様子。 ペアになって、一人が相手の身体に触れ、触れられたらそっと抜けて また相手に触れて止まる、という「さわってぬけて」というワークを、 『ひかりとともに』の曲に乗せて、ダンスと音楽を合わせてみました。 さらに、『なべなべそこぬけ』や『ともだちはインディアン』など、曲をモチーフに、 タイコやフルート、ギターの演奏とダンスを、その場で一緒につくっていきました。

# **12/28** 学園坂スタジオ (CD 1、4、7 に収録)

# みんな一緒のワークがとっても楽しい!

午前中はみんなで一葉むさしが丘学園のお餅つき大会に参加し 午後からのワークショップでは、これまでのワークをベースにして動きを考えたり、

曲のコール&レスポンスで子どもたちにリードしてもらったりしました。

タイコを叩いていると、子どもたちが「音が人によって違う!」と気づき、

一人ずつ叩いて音を比べてみました。

後半は音楽とダンスでチームを分けて練習してから合わせるなど、

一緒にうたったりおどったりする楽しさが増していきます。





# うたうこと 演奏すること

替え歌をつくったり 即興ダンスをしてみたり 早口言葉のような歌詞やセリス コール&レスポンスなども。 ちょっとぐらい失敗しても大丈夫 声をかけ合いながら一緒に 歌いました。

# 12/29 職員さんも加わって、 みんなで作品をつくり Fげます!

向かい合った二人が、ゆっくり近づきながらお互いの動きを真似 するワークを「向こう岸のあなた」と題し、音のない静かな時間 の中で集中して、じっくり動いてみました。また、2つの動物を 組み合わせた架空の動物「ネコアザラシ」「ヒツジワニ」などの 鳴き声や動きを考えました。

職員さんもギター演奏で参加することになり、

最終回に発表することのイメージも広がっていきます。

1/25 三芳町立竹間沢公民館 音楽室、和室 (CD 2、3、5、6 に収録)

# 本番に備えて総什上げ!

みんなすっかり馴染んで、うたや演奏、ダンスを楽しんでいる様子。 発表内容を確認しつつ、その場で起こることを大切に進めていきます。 いろんな人とペアを組むことや、録音することを意識して歌うことも なんだか楽しそうで、子どもたちが前向きなことが感じられました。 休憩時間には、ホワイトボードにお絵かきしたり、

自作の詩や歌を聞かせてくれたりと、

隙間時間にもいろんなことが起こるようになっていきました。

# おどること

相手の動きを直似しながら動く ワークなど、ペアをどんどん交代して、 いろんな人と関わりました。 決まった振り付けがなくても、 相手がいて、少しのルールがあって、 そこから自然といろいろな動きが 引き出されていきました。



# うたもおどりも身体から

ワークショップの内容は、事前に全てが決まっている訳ではありません。 その時々の子どもたちの反応を見ながら、一人ひとりに寄り添いながら、 同じ曲、同じワークでも、うたや踊りは毎回少しずつ変化していきました。 音楽とダンスを行き交いながら、リズムを感じて身体を動かすことから 牛まれていく出来事。

そうしてみんなで共有してきた音楽とダンスを携えて、発表会を迎えます。

# 2/15,16

# にじいろのなかまたち

最後の2日間は、それぞれの施設で発表会を行いました。 リハーサル練習の始まりに、「発表会のタイトルを考えよう!」と 提案してくれた子どもたち。

カラフルな衣装からなのか、いくつか候補が挙がった後 『にじいろのなかまたち』に決まりました。

披露したのは、ワークショップで取り組んできた楽曲やワークから、 次の5つのシーンです。

『ともだちはインディアン』 『カッパのロック』 『向こう岸のあなた』 『ひかりとともに』 『なべなべそこぬけ』





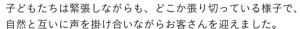












発表会は、段取りや決まったことを再現することだけが目的では ありません。時々歌詞を忘れたり、段取りを間違ったりしても、 誰かが補って、みんなでつくっていった発表の時間。

1日目の振り返りでは、 「明日も笑顔でできるようにしたい」 「明日もみんなと楽しくやりたい」と 翌日を楽しみにしていることが伺えました。

また、観客の方々にもその場で子どもたちに感想を伝えてもらい、 「みんなに良いエネルギーをもらいました」 「今日までの間に楽しいことがいっぱいあったんだろうな、 ということが伝わってきました」 「みんながいっしょくたになっているのがとても良かったです」 など温かい言葉をいただきました。

2日目の発表の後には、1年間の区切りとして、ジュースで乾杯。 一人ずつ、みんなの想いを聞いてみたところ、 子どもも大人も関係なく「またやりたい」という声がたくさんあり、 自然とこれからのことに話が広がっていきました。









来年は月に2回ぐらいやりたい!

(N さん・高校生)

緊張したけど楽しかった! (Kさん・小学生)

最初は人見知りして なにもできなかったけど、 だんだんみんなとも 仲良くなって楽しかった いい思い出ができてよかった (Yさん・高校生)

> **音楽が大好き!** 次は自分で作詞をした歌詞を 曲に起こしてみたい!

(S さん・高校生)

最初はみんな緊張してたけど どんどん笑顔が出てきて よかったし楽しかった (Sさん・高校生) やっていくうちに 仲いい子ができたりして、 知らないところなのに 近づいてく感じがして楽しかった! (Yさん・高校生)

来年はもっともっとやりたい!

(Hさん・小学生)

歌も好きだし音楽ぜんぶが好き!はじめは小学生がいっぱいで緊張して人見知りしたけど、回を重ねると「楽しいなー!」って瞬間がたくさんあって。来年もやれたらいいな。来年はもっと回数を増やしてみんなともっと交流したい!

他の場所でやったり いろいろあっていろんなこと経験できた 他の施設の人とやったのはいい経験になった

(Aさん・高校生)

### 関わってきた大人たちから



# カルテット職員 吉田さん

このワークショップが始まってから、

参加している子どもたちの笑顔が増え、とても楽しんでいた様子でした。 高校生が小さい子たちに積極的に関わっていたのを見て、 施設間の子どもたちに年齢差があったことも良かったのではと思います。 また、ワークショップが外に出るきっかけになったのも良かった。

初日の発表会の帰り道で、子どもたちが「次回はもっとこうしたい」「オリジナル曲をやりたい」などアイディアを話してくれました。 このワークショップは、大人の発表のついでではなく、子どもたちが主役でした。 そのことも、彼らが積極的に関われた理由のひとつではないかと思います。

楽器や歌やダンス、それぞれ課題をクリアしていって、技術を付けていきました。 本番に向けてどんどんクオリティが上がっていた過程が見れました。

**僕も最初は引率のみのつもりでしたが、ギターとして参加することができてとても楽しかったです。** 



### 二葉むさしが丘学園 職員 緒方さん

普段言葉によって自分の気持ちを上手く表現できない子どもたちが 歌やダンスによって自分の気持ちをありのまま表現できている姿を見れて 良かったなと感じました。

また、相手に自分の思っていることをオープンに伝えることの大切さ、 言葉だけでなく様々な思いの伝え方があることを子どもたちに感じてもらえたのかな と思います。このように多くの人たちと歌やダンスに触れ合える機会は少ないと 思うので、子どもにとっても私にとってもとても貴重で大切な経験になりました。



### カルテット 大原施設長

見ていてこっちも楽しくなるような、

作りこんでいなくて自由にやっているのがすごく伝わってきて、 良かったなあって思います。

まさに音を楽しんでいるというか、音楽だなあって思いました。 いいものを見せてくれてありがとうございました。

# リズムに身をまかせる

谷森駿 (作詞家)

いないいないばあ。転がる糸巻きの比喩から、フロイトが反復のはじまりをいないいないばあ (fort-da の訳語)として説明したことがあった。いる / いないことからはじまるリズム。産まれる以前から誰もが備えている反復=リズムの感覚。それはフロイトが規定した「無意識」の出来事でもあり、そう簡単に汲み尽くせない、ほぼ謎に満ちた時間でもある。いないいないばあ、この呼びかけは音楽や演劇の、あるいはダンスの祖型といってもいいのかもしれない。

いないいないばあのようなシンプルな遊びから、人は少しずつ年齢を重ねていくと、例えばなべなべそこぬけのようなわらべうたに辿り着く。二人組になって正面から手をつなぎ、からだを前後にひっくり返す。なべなべそこぬけ、底が抜けたら帰りましょ、と再度うたうと二人は元通りに対面することになる。この単純な繰り返しは、いないいないばあのヴァリエーション(変奏)とも思えるし、より謎が深まっているとも言える。なぜ鍋の底が抜けるのか。底が抜けて、なぜ帰るのか。どこに帰るの?このナンセンスな詞をどう

解釈してもしきれない。まして、嬉々として延々とこれを続ける子どもたちをみていると、謎も存在論も、 そんな大人の勝手な見方がどこかへ吹き飛んでいくようだ。

かごめかごめに至ってはもはや立派な演劇であり、 ミュージカルであり、神話がたりでもある。供儀や牢 獄を連想させるその様は、すでに意地悪で残酷な人間 社会の暗喩ともいえる。夜明けの晩やうしろの正面な どという言い回しにしても、そこに奇妙な撞着語法や ブラックユーモアがはっきりとみてとれる。まるで言 葉をはぐらかす権力者の喩えでもあるかのように。囲 め囲めとうたわれ眼を塞ぐ鬼は、逃れられぬ庶民の姿 のようでもある。それでも子どもたちはお構いなしに 遊びを続ける。どこか空恐ろしいとも思うが、こうし たうたがどこででも自然発生することもまた、誰もが リズムを備えていることの証左ではあるだろう。

わたしたちはリズムなしに生きることは難しい。う たや踊りは、文献からすると少なくとも紀元前から脈々 と育んできた芸能・芸術である。おそらく有史以前からの営為だと思われるが確たる物証はない。だが哺乳類や鳥類、昆虫などをみても分かるように、リズムは言葉以前の表現手段だった。もっといえばヒトという種以前の、生物の行動原理だった。おそらくは数万年~数十万年にわたる自然の生態であり、その蓄積だろう。わたしたちの身体が、つい勝手に踊りだしたり、言葉の意味が分からずともついメロディを口ずさんでしまうのは、そのような長きにわたる先人たちの智慧や身体の伝統に根ざしているからだと思われる。

そうだとすれば、例えば「音楽」というような枠組みが単なる近代のフィクションに過ぎないことが明らかになってくる。あるいは「教育」などという制度もきわめて疑わしくなる。わたしたちはプラトンに過度に依存しているのかもしれない。強い国家を作るため、卓越した人材を生み出すため、学校が建てられ、教育システムが構築され、その一教科として音楽や体育が導入される。このような指向は古代ギリシャに端を発し、この二千年来、いまだにそのような競争原理のさ

なかをわたしたちは生きている。少なくとも「卓越」のような発想を、いま一度改める必要があるだろう。 人が記号化・数値化され成績・データとなり、それをもとに強者と弱者が再生産され続けるようなシステムに、今日どれだけ正統性があるだろうか。それはあらゆる差別構造の温床なのではないだろうか。

そもそも障害などない。自明のものではありえない。あるのは、そう名指すことではじめて自律するプラトン由来の権力だけだ。制度はいまや強大で測り難い。誰の手にも負えないほどに複雑化し構造化している。この巨大なシステムから離れて、子どもたちの避難所を構想できないか。そのための小さなメロディ、とりとめのないフレーズやリフレインを響かせること、鳥のようにうたい、身体を十全に開き、ヒトが長い時間をかけて培ってきたリズムに身をまかせること。そこから立ち上がるのは個ではなく類であり、主体や意志ではなくクリナーメン(傾斜・傾向)のようなものだろう。そのような方策にいくばくかの可能性があるのかどうか、実験を続けていければと願う。

13

# 時間と空間を共有すること ~自立支援とアート~

二葉むさしが丘学園 自立支援コーディネーター

鈴木章浩



して、「孤立感、孤独感」を挙げている。

社会的養護当事者に限ったことではないが、社会で「孤独死」が騒がれてから、かなりの月日が経過している。この件に関する統計は、高齢者だけの問題ではないことを物語ってもいるという。人間関係の希薄さ、周囲への無関心、歴史的な社会構造等々、要因は、様々叫ばれている。現在でも、益々、深刻化する実態が明らかになっている。

日本は幸福度及び「人生の選択の自由」が低い傾向にあると言われている。ある分析結果は、自己決定度の高い人の方が、幸福感が高いというものであった。幸福感は、所得や学歴、健康、人間関係では得られないと言われている。では、何が必要か?それは「自己決定」が幸福度を高めるという。

しかし、「自己決定」をする前提として、自己表現のスキルを身に付けておくことが必須条件になってくるのではないだろうか?まして、社会的養護当事者は、それぞれの時期や期間は違えども、何かしらの表現をした結果、その表現を否定され続け、時には、自分自

身の存在そのものをも否定されてきた経緯がある。そ のような体験をしてきた子どもたちの多くは、自己主 張や自己表現が苦手である。

このワークショップでは、それぞれのアーティストが持つアプローチにより、心に傷を負っている子どもたちに、少しずつ、「あなたらしい表現をしていい」「あなたは、あなたのままでいい」というメッセージを送っている。アーティストの関わりは、「五感を使う」「身体を大切にする」など言葉では伝えられないもの、言い表すことが難しいものを体感させていく。何気ないパフォーマンス、コミュニケーションの中に「意味」「目的」がたくさん詰まっている。他者の共感を知るということと同時に子どもたちが自信を持てる空間、時間が、そこにはある。

今回のプロジェクトでは、私もギターの伴奏で参加をさせてもらった。子どもたちは、職員が普段見せない部分を知ると大喜びをする。それは今も昔も変わらないようである。また、他施設との交流は、子どもたちにとって、多様な人にかわいがってもらう体験にも繋がっている。今、抱えている自立支援の課題への切り口として、「心地良さ」「奏でる」「程よい越境行為」「持ちつ持たれつ」「お節介」「老婆心」などの key wordが浮かび上がっている。引き続き、視点を展開しながら考えていくこととしたい。

つい最近、冒頭に紹介した退所者と会った。彼は、 自分の特性として、「有ることじゃなくて、無いこと ばかりを数えてしまう」と嘆いていた。私には、まだ 返す言葉が見つかっていない。

### おわりに

# 『にじいろのなかまたち』のこれから

今回の企画は、今まで出会ってきた子どもたちや、その都度新鮮なアプローチで子どもたちと場をつくっていたアーティストの姿を思い浮かべながら考えた企画です。実施に当たっては、施設の職員の方々やアーティストの方々と、事前の打合せやワークショップ後の振り返りを丁寧に行い、対話を重ねながら内容を検討していきました。そして、8月に子どもたちと出会った日から、具体的になり、広がっていった出来事もたくさんあります。

今回に限らず、様々な場で出会う子どもたちの姿を通して、児童養護施設のことや、障害とは何なのかということを考えます。そして子どもたちが生きる未来について考える時、うたったりおどったりすることが、一体どれほどの力になれるのか、という疑問が浮かびます。子どもたちが直面している、いま、そして未来があまりに希望がなく感じられることもあります。

それでも、誰かと一緒に笑ったり困ったり、うたったりおどったりしながら時間を共に過ごすこと、それができる場が、いろんな形でそこここにある未来を想像してみます。

「またやりたい」と、これからのことを話してくれた子どもたちや大人たち。他にも行ってみたい場所はあるし、誰かを呼んで来ても良いかもしれない。これから出会えるかもしれないどこかの誰か。そうして、私たちは誰とでもどこででも、共に生きることが可能でしょうか。

この一年、私たちは、友だちだったろうか?家族だったろうか? 子どもたちの発した『にじいろのなかまたち』とは、どんなつながりになり得るのだろうか。 たくさんの疑問や期待と、一人ひとりの声を大切に抱え、声にならない想いに寄り添いながら、 このゆるやかなつながりを続けていけたらと願います。

うたやおどりと共にみんなで紡いだ時間が、 笑って日々を過ごすちょっとした糧になりますように。

芸術家と子どもたち 事務局長 中西麻友

# 私たちについて

# 芸術家と子どもたちの活動

芸術家と子どもたちは、1999年に発足、2001年から NPO 法人として活動を行っています。 私たちが取り組んでいるのは、現代アーティストと、いまの子どもたちが出会う「場づくり」です。この出会いが、

子どもたちにとって 潜在的な力を存分に発揮し伸ばす機会

アーティストにとって子どもたちと関わり、新たな表現を探る機会になると考え、

主に3つの活動に取り組んでいます。

# ASIAS (エイジアス)

ASIAS は、Artist's Studio In A School の略で、アーティストが小学校(特別支援学級含む)等 へ出かけていって、先生と協力しながらワークショップ型の授業を実施する活動です。 2010 年度からは、児童養護施設などでも同様の取り組みを開始し、福祉分野でも自立支援に つながる多様な体験を育むワークショップの可能性を開拓し、実践を積み重ねています。



#### パフォーマンスキッズ・トーキョー

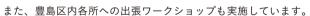
ダンスや演劇、音楽などの分野で活躍するプロの現代アーティストを、都内の小中学校や ホール・文化施設・児童養護施設などに派遣。10日間程度のワークショップを行い、 子どもたちが主役のオリジナルの舞台作品をつくり上げます。

最後に発表公演を行い、多くの方々にワークショップの成果を発信しています。



### ぞうしがや こどもステーション

子育で中の親子・家族がいっしょに楽しめるあそびのスペース。 子どもや親子を中心に地域の人々がアートを通して交流する場をつくります。 世界中の歌をうたい、楽器をかなで、おどり、絵本にふれ、そしてお芝居まで、 ワークショップを気軽に楽しめる場をつくっています。





NPO 法人芸術家と子どもたちでは、私たちの活動を理解し、協賛・助成・寄付といった形で 支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。ご関心をお持ちの方は、 ぜひ事務局までお問い合せください。https://www.children-art.net/support/donation/

# NPO 法人芸術家と子どもたち 事務局

〒171-0031 東京都豊島区目白 5-24-12 旧真和中学校 4 階

TEL: 03-5906-5705 FAX: 03-5906-5706 mail: mail@children-art.net HP: https://www.children-art.net/



#### 文化庁委託事業

「障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)」

主催:文化庁、特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

発行日:令和2年3月15日 発行者:特定非営利活動法人芸術家と子どもたち

編集・デザイン:保手濱歌織 CD 制作:FIND MUSIC

※無断転載・複製を禁ず。



# 巻末の CD について

この付属 CD は、2019 年 12 月 28 日と 2020 年 1 月 25 日に行われたワークショップの一部を録音したものです。うたや楽器の演奏や、演奏に合わせて踊っている様子などをお聞きいただけます。

#### trackl \_ 『ストップ&ゴー!』(ダンスワーク) 2:28

ピアノの即興演奏に合わせて、演奏中は動いて、演奏が止まったらポーズする「ストップ & ゴー!」というワーク。

慣れてきたら、止まる時に「誰かと握手」「背中と背中で握手」など、アーティストがお題を加えて動きを引き出していきます。

次第に子どもたちの方がお題を考えるようになり笑い声の絶えない時間になりました。

track2,track3 \_ **『なべなべそこぬけ』**(わらべ歌) track2=0:41 track3=2:15 シンプルなメロディをみんなでくちずさむ、高校生らがギターのコード弾きを加え、またフルートでユニゾンするなど、その場の臨機応変なアレンジ。 さらに小学生たちがオリジナルの振り付けを練習、賑やかで楽しい時間になりました。

track4,track5\_『カッパのロック』(詞・曲:港大尋) track4=3:45 track5=3:04 参加した子どもたちが打楽器を練習、叩きながらうたうことにも挑戦。 早口言葉や小芝居ふうのセリフも挿入され、ユーモラスな雰囲気に仕上がっています。 また、ロックのリズムに乗せた自由なダンスも。キャーキャー盛り上がっています。

### track6\_ 『ともだちはインディアン』(詞・曲: 港大尋) 3:44

「あのね」と呼びかけると「あのね」と応え、「わたしのね」とうたうと同じように追いかけっこ。子どもたちでソロの順番を決め、みんなドキドキしながら歌っています。間奏では子どもたちがオリジナルの動物「タヌキキツネ」「イヌベガサス」「オウムキャパリア」などを発案、例えばワンワンと鳴きながら同時に羽ばたくような面白いダンスを披露。

track7\_ 『ひかりとともに』(詞・曲: 港大尋 原曲: バッハ/グノー) 3:20 グノーのアベマリアをサンバ調にアレンジ、さらに日本語を乗せた楽曲。 親しみやすいメロディゆえか、子どもたちが大きくのびやかな声で歌っています。

#### total time 19:17

※子どもたちが演奏した楽器 (track 2~5): フルート、トランペット、ギター、ピアノ、タイコ